

花袋君の芸術

島崎藤村

『花袋君の強い執着は私達の煩惱を代表しているような趣がある。正直に純真に、君は自己の欲するところをその芸術に実現せずには置かなかつた。君の芸術は人間の煩惱を回避しないで、底深く突き進んで行ったところから生まれた。そこに近代人としての君の特色を見る。』

こんなことを物の端に書きつけたこともある。私の君に敬服するのは、小学校の過程しかふまないという程の境遇の中から独学であれだけのその位置を築きあげたということでもなく、尋常人の為し得ない多数の作品を作って永い間文壇に貢献せられたということでもなく、実にこの近代人のひるまない精神をもって行けるところまで行こうとしたところにある。その勇氣は尊い。何といっても君は二十世紀が生んだ日本の作家で、強い執着を持ったという点にかけては、十九世紀の人達、殊にあの一茶などの氣質を受けついでところがあると見てもよからうと思う。尤も一茶の執着は比較的陰性のものであり、そこへ行くと花袋君のはもっと陽性のものであったような気がする。

花君のたくましい精神は世にも稀に見る強壯な肉体に宿って、大きな作者というに恥ずかしからぬ多量な創作がそこから生ま

れて来た。その中でも『生』『田舎教師』などの初期のものから『時は過ぎ行く』『一兵卒の銃殺』『ある僧の奇蹟』『残雪』と次第にその創作の境地を深めて行ったことが思い出される。晩年に近づいてからの著述の中には『源義朝』のような歴史小説もあり『夜座』のようないい感想集もある。『百夜』という長篇は福日に連載したもので一冊の本になるのを見ずじまいに逝かれたし、地方の新聞に載せられた為かあまり文壇の批評にのぼらなかつたようであるが、あれは如何にも君の晩年にふさわしい作であつた。いんぎんに春を報ずるともいった書き振りで、静かに深い、ちよūd君の生まれた上州の平野を思い起こさせるような作品であつた。平坦のようでもそこにつきない味のこもっているのがあの『百夜』だと私は思う。

田山君もまだそれ程の老年という訳でもなかつたし、あの病気が治つたらと思つて、これから君の書かれるものに私は深い期待をかけていたのに、おしい人を亡くしてしまつた。田山君というと、世人はすぐ自然主義を連想する程その方の代表者のように考えられて来たが、然し私の見るところでは、君は主義の人であるよりも、もっと詩人であつたと思う。(談)

○ (昭和五年五月「讀賣新聞」)

永の別離となつた床の上で、花袋子は自作の詩一首をわたしに贈ろうと言つて、みづからそれをわたしに読み聞かせてくれた。

雨五六条春尚浅

鶯三四轉遠庭枝

点々隣家羨花早

雖有園梅我発遅

意の趣くところには、筆もまた従うとも
いふべき実に自由な書体で、この詩が半折
の画箋紙がせんしにしたためてあった。

格に入って、格を出た人の到り得た境地だ。

『百夜』一篇を貫く情熱と、何物にもこだわ
らないような作品のすがたとは、子が晩年
の書風に似たものがある。（「百夜」の序よ
り）

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新仮名遣
いに改めた。

※出典 当館所蔵「花袋全集 月報 第八号」（昭
12年1月18日）